ISSN 2188-0638

The Fulbrighter in Nagoya

No.28

February 2019

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter In Nagoya No.28

目　　次

第 1 章　木下　徹　名古屋大学大学院人文研究科　教授

脳科学と言語教育：脳画像イメージングの応用を中心に　（講演会 要旨抄録）

第 2 章　地村みゆき　愛知大学経営学部　助教

米国先住民が演じた「インディアン」

―Charles A. Eastman と Angel De Cora の取り組みを通して―

3.会務報告

会則

役員名簿

第１章

木下　徹
名古屋大学大学院人文研究科　教授

2018 年度名古屋フルブライト・アソシエーション
講演会 要旨抄録

脳科学と言語教育：脳画像イメージングの応用を中心に

この講演では、脳画像イメージングの言語教育学・言語習得論への応用の可能性として、大略以下の４つの点からの入門的解説を試みた。

1　脳の構造と脳機能の概観
2　脳画像イメージング手法の解説
3　研究例紹介
4　今後の可能性と課題

1. 脳の構造と脳機能の概観

このうち、まず、最初の脳の概観については、最も、基本的な解剖学的な区分けを紹介した。つまり、人間の脳は左右半球があること、両半球とも、一番大きな部分を占める大脳皮質は、前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉の４つの区

域に大別されることをまず指摘した。より詳細に言えば、前頭葉は、文字通り脳の前方にあり、脳の前後の方向に走る外側溝という皮質のくぼみ＝溝と、脳の左右の方向に走る中心溝という溝によって囲まれ、側頭葉は、外側溝の下側で、頭頂後頭溝という溝の前方を占め、頭頂葉は、中心溝より後方で頭頂後頭溝の前方、外側溝より上の区域であり、最後の後頭葉は、頭頂後頭溝より後方の後頭部の領域を指す。

このような大脳皮質を中心とする脳の中で，言語情報を含む、様々な人間の営みはどのように処理されているかについては、古来様々な説が唱えられてきたが、比較的長く議論されてきた２つの考え方として、局在説と偏在説がある。大雑把に言えば、機能局在説というのはある特定の機能は脳の特定の部位が，中心的に担っているという考えで、偏在説は、そのような特定部位を想定するのではなく、脳全体で処理するという考えである。この２つの説は、厳密には、現在でも完全に決着がついたとは言えず、また、この２つをある意味で統合する考えとして、ネットワーク仮説というのも唱えられるようになってきた。即ち、ある機能は、脳の様々な部位がネットワークを構築して、そのネットワークが全体として，様々な機能を果たすが、その中でも、機能によっては、相対的に重要な役割を果たす部位が存在するといったような考え方である。

言語機能については、近年，言語を理解するのも、産出するのも、これまで知られてきた以上に多くの箇所が関与して実現されているとする研究が増えているが、この講演では、とりあえず、比較的早期から知られてきた、前頭葉の下部での盛り上がった部分（回）にあるとされるブローカ野を、産出において、同様に、側頭葉の上部でやや後方にあるとされるウェルニケ野を、理解において、それぞれ重要な役割を担う部位として紹介した。

２　脳画像イメージング手法の解説

ついで、この講演では、言語を始めとする様々な脳の働きを測定する方法、特に、近年発達が著しいとされる脳画像イメージングについて、いくつかの主要な技法を解説した。それらは、脳神経活動自体を測定するものと、脳神経活動につれて、付随して起こる脳血流の増減を測定するものの２種類に大別される。前者としては、比較的早くから使用されてきた脳波計と、ここで紹介する技法の中では最も新しい脳磁計というものがある。脳波計は、脳の神経活動により生じる電位の変化を測定するのに対して、脳磁計は、脳神経活動によって

引き起こされる磁場の変化を測定する。一方、陽電子断層撮影法(PET)、磁気共鳴画像法(fMRI)、近赤外分光法(fNIRS)として知られる方法は、いずれも、脳神経活動に随伴する脳血流の変化を測定するものである。このうち、PET だけは放射性同位体を含む薬剤を注射により投与するので、いわゆる医学用語でいうところの侵襲的技法であり、研究倫理の面からも、健常者には使用しにくいのに対して、他の４つの方法は、いずれも、手術や薬物の注射による投与等を必要としない点で非侵襲的技法であると言われる。fMRI は、血液中の酸素化ヘモグロビンと脱酸素化ヘモグロビンがもつ、磁気共鳴現象における撹乱の程度の違い（後者が増えると共鳴現象が弱まる）を利用して脳活動の各部位における賦活の度合いを可視化する。これに対して、近赤外分光法（fNIRS）は血流中の酸素化ヘモグロビンと脱酸素化ヘモグロビンが、それぞれ、特定の波長の近赤外光を吸収しやすい性質を利用して、脳活動の各部位における相対的な強弱を画像化するものである。

これらの技法の長所短所としては、脳波計は、装置が簡便で安価なことや身体への拘束性は低く、また、脳神経活動自体を計測するため、時間分解能は極めて優れているが、空間分解能，即ち、脳波の発生源の部位を空間的に精密に特定するのが難しい。fMRI はその反対に、空間分解能は非常に優れているが、脳神経活動そのものではなく、それによって引き起こされる血流の変化を対象としているので、時間分解能の点ではタイムラグの問題がある。また、装置自体も高価で、磁気シールドルームが必要等、装置が大掛かりで、身体の拘束性も大きい。脳磁計は、脳神経活動自体を測定するので、時間分解能は勿論、空間分解能にも優れているが、地磁気に対して人間の脳における磁気の変化が相対的に極めて小さいため、地磁気その他環境ノイズに対する高度な対策が必要で、そのこともあって価格面で、fMRI よりもさらに高価であるといった問題を有する。これらに対して、近赤外分光法は、装置が比較的簡便で価格も脳波計よりは高いが fMRI や脳磁計よりはずっと安価で、かつ、身体拘束も脳波計並みに低いという長所がある。しかし、近赤外分光法は、時間分解能では脳波計や脳磁計よりは劣るが、fMRI よりは多少上回っているが、空間分解能は、fMRI や脳磁計にはかなり劣る。つまり、前者が数ミリ単位のボクセルで脳の表面だけでなく、脳の中心部まで立体的に測定できるのに対して、近赤外分光法は、数センチ単位で、かつ、脳の表面＝皮質しか測定できないという特徴がある。

3. 研究例紹介

脳の構造と機能、脳画像のイメージングの主要な数種類について、解説した後、自分たちの研究グループが行った研究をいくつか紹介した。まず、木下他（2007）の同志社女子大学における教育工学会で口頭発表した研究では、マルティメディア教材を使用した聴解・読解複合課題において、実験参加者が学習方略を課題遂行の途中でかえた前後での、前頭葉を中心とした脳血流の変化を観察した。このケースでは、事後インタビューで、実験参加者は方略をかえた直後、理解度が予想外に下がったため、一時かなり慌てたと述べた。該当する時刻での血流は顕著に増加し、実験参加者の証言を裏打ちする結果が見られた。

次いで、Kinoshita and Oish (2008)のドイツでの国際応用言語学会（AILA）で口頭発表した研究を紹介した。この研究では母語と目標言語の距離と脳血流の関係を取り扱い、母語と目標言語の距離が比較的近い群と遠い群では、後者の方が、同一の課題を遂行するとき、相対的に脳血流の増加が大きく、その分、認知負荷が大きいことが示唆された。また、高飛他（2014）では、中国人日本語学習者は、日本語の読解は母語である中国語での漢字の知識が応用できることから、認知負荷が少ない一方、聴解においてはその様な母語からの正の転移は見られないことことを示した。さらに、Kajiura *et al.*(2018) では、トランスクリプトを併用した速聴訓練の効果を、行動データの他、脳血流の面からも検証した。

なお、上記で紹介した４つのうち、古いものから３つは先に解説した技法では近赤外分光法を用いたのに対して、最後のものは fMRI を使用している。

4. 今後の可能性と課題

講演の最後では、今後の可能性と課題について言及した。まず、課題としては、技術的な面での産出面を中心とした真の脳活動に由来する信号とノイズの効果的分離の問題や、より原理的な問題として、課題遂行と脳の賦活の関係の探求が脳内での情報処理メカニズムの根本的な解明にどのようにして結びつけられるかといった点について言及した。

一方、今後の展望については、（１）バイリンガルのタイプの問題も視野にいれた、第１・第２言語の中枢の特定、（２）（１）との関連で、拡散テンソル画像等により或る程度明らかになりつつある脳内の神経基盤ネットワークの探求、（３）コミュニケーションが基本的には複数の人の間での行為であることを考

慮したとき、研究の自然な展開方向と言える、協同学習と複数の人の脳の測定、（４）習熟度や言語情報処理の自動化に関する新しいタイプの指標の開発、（５）無意識的反応測定を応用した効果的教授法等を含むバイオフィードバック的使用、その他として、（６）脳血流データを大規模データとみなしてのデータマイニング手法の応用、さらには、非侵襲的な経頭蓋的磁気刺激法等による、脳内の言語機能を始めとする各種機能の局在説の検証等等、今後の脳科学の発展とともに、ますます多種多用な可能性が存在することを指摘した。

参考資料

木下徹、宮本節子、大石晴美、今井裕之、柳善和
「マルチメディア教材利用時の視線移動距離、移動速度、瞳孔径と脳血流量変化：L2 学習者ストラテジーとの関連から」教育工学研究会、2007 年 10 月 20 日　発表資料

Kinoshita, Toru and Oishi, Harumi, "Cognitive resources and linguistic distances: inequalities among 'equal' L2 proficiency groups" AILA 2008 (August, 29, 2008) Presentation Material.

高飛、木下徹，梶浦眞由美（2014）「中国語を母語とする日本語上級学習者の読解と聴解における認知的負荷の比較」第 25 回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会予稿集, pp83-88.

Kajiura, M., Hyeonjeong, J., Kawata, Y. S. N., YU, S., Kinoshita, T., Kawashima, R., Sugiura, M. The "Effects of L2 Fast-rate Listening Training Combined with Transcript Reading and Brain Activity."
24th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, June, 2018, Presentation Material.

第 2 章

米国先住民が演じた「インディアン」
―Charles A. Eastman と Angel De Cora の取り組みを通して―

地村みゆき
愛知大学経営学部助教（2018 年 4 月から）

こんにちは。先ほどご紹介をいただきました地村みゆきと申します。2011 年から 2012 年まで、フルブライトの博士論文研究プログラムを通してミシガン州立大学で学びました。2016 年 3 月に同志社大学アメリカ研究科の博士後期課程を修了しまして、現在は愛知県内の複数の大学で非常勤講師として英語を教えています。

今回はこちらで初めてお話をさせていただくので、私の今まで行ってきた研究について紹介させていただきたいと思います。これまで私は、「20 世紀転換期における、アメリカ先住民による先住民表象の戦略的利用」について研究を行ってきました。何故、私がアメリカ先住民のイメージを学ぼうと思うようになったのか。20 世紀転換期を生きた先住民たちは、彼らに対するイメージとどのように付き合ったのか。これからお話していきたいと思います。

1. はじめに

この 1 月から、スミソニアンのアメリカ・インディアン博物館で新しい展示が始まりました[1]。タイトルは“Americans”。展示の冒頭で見学者たちに投げかけられる質問は、これです。“Why are Indian images everywhere?” 私はまだこの展示を実際には見に行けていないのですが、まさにこの疑問こそが、私が先住民のイメージに興味を持つようになったきっかけでした。皆さまご存知のところだと思うのですが、アメリカの総人口の中で、自分を先住民であるとする人は約 1%だと言われています。スミソニアンの展示を企画したポール・チャート・スミス（Paul Chaat Smith）の言葉を借りると、アメリカの南西部など、特定の地域には目に見える形で先住民の人々は生活していますが、ほとんどのアメリカ人にとって、先住民はヴィジブルではない。でも、イメージとしてのインディアンは、日常のあらゆるところに存在している[2]。

図 1. Chief Wahoo

クリーブランド・インディアンズは最近、2019 年のシーズンから「チーフ・ワフー（図 1 参照）」のマスコットを使用しないことに決めたそうです[3]けど、スポーツ・チームのマスコット問題も未だにあります。

しかし、こうしたイメージが未だにアメリカ社会に残っているという理由の 1 つには、それだけ「インディアン」のイメージとアメリカ的アイデンティティおよびアメリカ先住民のアイデンティティとの間に、切っても切れない深いつながりがあるからではないかと思います。私はこのような問題意識をもとに、20 世紀転換期を生きた先住民たちが、どのように白人の期待する「インディアン」のイメージに付き合い、どのような取り組みをしてきたのかを研究してきました。というわけで、今から、私が論文で扱ったアメリカ、20 世紀転換期の歴史的背景と、同化教育を受けた先住民の取り組みについてお話しします。

2. 語句、視座、本研究の位置づけ

本題に移る前に、まずはこの報告で使用する語句について説明させていただきたいと思います。私は本報告を通して、ヨーロッパ人到来以前から北米の地に居住していた人々とその子孫の総称として、「先住民」を使用します。また、この報告でその個々の集団に言及する際は「部族」ないしは個人の出身「部族」の名称を使います。

また、私はこの報告を通して「インディアン」という言葉を、白人により作り出されたア

---

[1] “Americans,” The National Museum of American Indians, accessed on February 21, 2018, http://nmai.si.edu/explore/exhibitions/item/?id=957.

[2] “The Most American Thing Ever Is in Fact American Indians,” *Primer,* accessed on February 21, 2018, https://walkerart.org/magazine/paul-chaat-smith-jimmie-durham-americans-nmai-smithsonian.

[3] David Waldstein, “Cleveland Indians Will Abandon Chief Wahoo Logo Next Year,” *The New York Times*, January 29, 2018, accessed on February 21, 2018, https://www.nytimes.com/2018/01/29/sports/baseball/cleveland-indians-chief-wahoo-logo.html.; ロゴについては以下のサイトを参照。 “Cleveland Indians Logos,” Chris Creamer’s SPORTSLOGOS.NET, accessed on March 2, 2018, www.sportslogos.net/logos/view/5799872014/Cleveland_Indians/2014/Alternate_Logo.

メリカ先住民に対するステレオタイプ、そして後に先住民の人々が積極的に利用し、書きかえようとするイメージを示す言葉として使用します。

「文明化」という言葉に関しては、白人を模範とするアメリカ主流社会へのアメリカ先住民の「同化」という意味で使用します。

次に、この報告で利用する視点についてです。私はこの報告において、先住民をジェラルド・ヴィゼナー（Gerald Vizenor）の作った「サヴァイヴァンス」という視点を用いて語りたいと思います。サヴァイヴァンスとは、単に生き延びるというだけでなく、白人による支配への抵抗という能動的な意味での先住民の存在と先住民の語りの継続を示す言葉であります[4]。このサヴァイヴァンスという視点を用いると、白人が先住民を心身ともに支配しようとする植民地主義的な状況下においても、白人がもたらす「支配、悲劇、被害者化[5]」に抵抗し生き延びた積極的な行為者として先住民を読みとくことが可能になります。同じことですが、私はクレイグ・S・ウォマック(Craig S. Womack)による「Indianization (インディアン化、先住民化)[6]」という考えを用いることにより、白人「文明」によるアメリカ先住民の取り込みという、「同化」や「文明化」が「一方向」にしか向かないという白人至上主義的な視点で先住民表象を語るつもりはありません。その代わりに、この報告を通して、白人が先住民を「インディアン化」しようとしている中で、先住民も白人を「インディアン化」しようとしていたのではないかということを示唆したいと思います。

先行研究についてです。「インディアン」というイメージは、皆さんご存知のように植民地主義の産物であります。先住民の表象の研究の第一人者であるロイ・ハーヴェイ・ピアス（Roy Harvey Pearce）は、*Savagism and Civilization* において、白人が「野蛮」と「文明」という二項対立の関係で自身を認識してきたことを明らかにしました。「インディアン」は白人にとって、自分たちとは全く正反対のものであり、その「野蛮」な他者は、その「文明」の拡張を進める自分たちの正当性を裏付けることのできる、好都合なイメージであったのです。そういった考えは、ロバート・F・バークホファー（Robert F. Berkhofer）やシェリー・L・スミス（Sherry L. Smith）などの、白人がイメージする他者としての「インディアン」表象研究につながり、白人がインディアンという「他者」を通して、どのように自分について考えていたか、そして、それらのイメージが連邦政府による先住民政策にどのような影響を与えたか、という観点から研究がなされてきました[7]。

---

[4] Gerald Vizenor ed., *Survivance: Narratives of Native Presence* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2008), 1.
[5] Gerald Vizenor, *Manifest Manners: Narrative on Postindian Survivance* (Lincoln: University of Nebraska Press, 1999), vii.
[6] Craig S. Womack, *Red on Red: Native American Literary Separatism* (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999), 12.
[7] Robert F. Berkhofer, *The White Man's Indian: Images of the American Indian from Columbus to the Present* (New York: Vintage Books, 1979); Sherry L. Smith, *Reimagining Indians: Native Americans through Anglo Eyes, 1880-1940* (Oxford: Oxford University Press, 2000). 先住民表象の先行研究について詳しくは、Miyuki Yamamoto (Jimura), "Truly Indian…Truly American: Native American Activism and Identity at the Turn of the Twentieth Century" (PhD diss., Doshisha University, 2016), 8-14, accessed February 21, 2018, https://doors.doshisha.ac.jp/duar/repository/ir/23039/zk778.pdf, Doshisha University Academic Repository および Pauline Turner Strong, *American Indians and the American Imaginary: Cultural Representation across the Centuries* (New York: Paradigm Publishers, 2013), 4-16 を参照。

それらの研究は、白人による先住民表象の構築およびそのイメージに対する支配力を明らかにしてきました。しかしながら、その一方で、それらの研究は植民地主義の影響下にあっても、先住民が積極的に自身のイメージやアイデンティティ構築に関わって来た可能性を見落としていたように思います。「インディアン」のイメージが、白人による支配の象徴であるという理由で白人による「インディアン」イメージの構築だけを考察するのであれば、結局その研究は、先住民が歴史的に「アメリカに組み込まれ、市民権を与えられ、彼らの保留地への居住や文化的遺産の継続を許された[8]」、白人の征服の「受身の被害者(passive victim)」であるという考えを論証しているにすぎないと思うのです。

「インディアン」のイメージ構築への先住民の関わりを指摘した研究者で一番有名なのはフィリップ・J・デロリア（Philip J. Deloria）だと思います。デロリアは "Playing Indian" というフレーズを作り、白人がインディアンを演じていたのと同様に、20 世紀転換期に先住民も「インディアンを演じていた」ことを明らかにしました。しかし、デロリアはそういった先住民が「インディアン」を演じることで、直面しなければならなかった逆説的な結果についても言及しています。つまり、先住民たちは、先住民に対するステレオタイプを変えるために「インディアン」を演じたのに、それは同時に、本物の先住民が「インディアン」を演じたために、そのステレオタイプを実は強化してしまうことにもつながったのです[9]。アメリカ・インディアン協会（The Society of American Indians）に所属していた先住民を考察したルーシー・マドックス（Lucy Maddox）もデロリアを引用して同じことを言っています[10]。しかし、そうしたジレンマに向き合わなければならなかったとしても、「インディアンを演じること」というのは、その当時、主流社会に彼らが意見を発信するために利用できる数少ない手段の一つであったわけです。本報告で発表するチャールズ・イーストマン(Charles A. Eastman)、エンジェル・デコラ(Angel De Cora)の 2 人は、それぞれ白人主流社会の先住民に対する期待を利用しながら、白人の子供および先住民の子供に対する教育を通して、彼ら自身が思い描く「インディアン」像をアメリカ社会に投げかけます。これからまず、20 世紀転換期の歴史的背景からひも解いていきます。

3. 20 世紀転換期の先住民を取り巻く状況

20 世紀転換期、つまり 19 世紀末から 20 世紀初頭において、先住民は、先住民教育をはじめとする同化政策や武力による民族浄化と、それらが原因で「絶滅」の道を辿る伝統的な先住民像の美化と称賛という、一見、相反する二つの潮流の中にいました。

連邦政府の同化政策の主軸であった保留地外の寄宿学校は、先住民の子供たちに「白人文明」を模範とする主流社会の生活様式を学ばせることで、主流社会への先住民の同化を促し

---

[8] Maureen Konkle, *Writing Indian Nations: Native Intellectuals and the Politics of Historiography, 1827-1863* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2004), 7.
[9] Philip J. Deloria, *Playing Indian* (New Haven: Yale University Press, 1998), 126.
[10] Lucy Maddox, *Citizen Indians: Native American Intellectuals, Race & Reform* (Ithaca: Cornell University Press, 2005), 4.

ました。この保留地外の寄宿学校は、それまでの、保留地内に設けられた昼間学校や寄宿学校における先住民教育を、より急進的な同化政策へと転換させるものでした。先住民を「白人文明」に完全に同化させるには、「野蛮な」文化慣習が少しでも残る保留地やその家族から子供を隔離して教育するべきと考えられたのです[11]

保留地外の寄宿学校として一番有名なのは、リチャード・ヘンリー・プラット（Richard H. Pratt）が 1879 年に創立した、カーライル・インディアン工業学校でしょう。プラットは、保留地から先住民の子供を半ば強制的に連れ去り、異なる部族出身の子供をひとまとめにして離れた場所で教育を受けさせる、というスタイルの学校を創立します（図２参照）。

図 2. カーライル・インディアン工業学校の先住民の生徒たち（c 1900）.

図 3. 3人のラコタ族の男子（ビフォー＆アフター）

学校に到着すると、子供は髪を切られ、洋装の制服へと着替えさせられ、西洋風の名前に改名させられました（図３参照）[12]。プラットの思想を表す言葉で有名なものに「インディ

[11] 宮下敬志「米国先住民「文明化」教育―ハンプトン農業師範学校における教育実践とその影響」『立命館文學』 第 604 号（2008 年 2 月）、190 頁。写真は以下のサイトを参照。"Carlisle Indian School Students [Photograph]," Children and Youth in History, Item #291, accessed on February 21, 2018, http://chnm.gmu.edu/cyh/items/show/291.

[12] John Nicholas Choate, *Three Sioux Boys—Before*, undated, Boudoir Size Photo Collection, Cumberland County Historical Society, accessed on February 20, 2018, http://carlisleindian.historicalsociety.com/images/three-sioux-boys-before/; John Nicholas Choate, *Three Sioux Boys—After*, undated, Indian School Albums, Cumberland County Historical Society, accessed on February 20, 2018, http://carlisleindian.historicalsociety.com/images/three-sioux-boys-after/.

アンを殺し、人間を救え（Kill the Indian in him and save the man）」という言葉があります。先住民の子供は、今までの文化慣習をすべて取り除かれ、アメリカの白人至上主義社会の底辺に属する生産的な市民となるべく、西洋的価値観に基づく性別役割分業の教育を受けたのです[13]。

1887 年に制定されたインディアン一般土地割り当て法（ドーズ法）は、保留地の土地を割譲して個人に割り当てることで先住民の共同体的生活を分解しました。その一方で、1890 年のウーンデッドニーの虐殺（図４参照）は、多くの人々にとって先住民の最後の武力抵抗、そして伝統的な先住民の「絶滅」を象徴するものでした[14]。このように、伝統的な先住民は先住民教育やドーズ法のような同化政策や、ウーンデッドニーの虐殺のような武力を用いた駆逐により、アメリカ社会からいずれいなくなるものと考えられていたのです[15]。

図 4. 新聞に掲載されたウーンデッドニーの虐殺後の光景

図５．「インディアン」の格好をする白人男性の一例（一番左はイーストマン）

こうして伝統的な先住民が「文明化」の道を辿るようになり、先住民が他の人々にとって軍事的脅威ではなくなってくると、皮肉にもこの消えゆく先住民を、アメリカの独自性を保証する象徴として美化し、称賛しようとする動きが生まれます。この頃、フロンティアの消滅とともに、急激な工業化や都市化の中で、自らが「文明化しすぎた」と感じていた人々は「荒野に住む力強く男らしい」先住民やカウボーイにあこがれを抱くようになります[16]。バッファロー・ビルが 1883 年に始めたワイルド・ウェスト・ショーは、約 50 年にわたってアメリカ国内およびヨーロッパに巡業し、人々の人気を集めました。そして、先住民の子供が同化教育を受けている一方で、白人の子供は逆にボーイ・スカウトの活動などで先住

---

[13] 寄宿学校のカリキュラムに関しては Kevin Slvika, “Art, Craft, and Assimilation: Curriculum for Native Students during the Boarding School Era,” *Studies in Art Education* 52, no. 3 (Spring 2011): 226-227.を参照。また、エンジェル・デコラ(Angel De Cora)が通ったハンプトン農業師範学校のインディアン・プログラムの具体的な設立経緯や教育実践については、宮下敬志「米国先住民「文明化」教育」、190-202 頁を参照。
[14] Picture of the Wounded Knee massacre, Newspaper Clipping in Goodell/Goodale Family papers, Jones Library Special Collection (hereafter JLSC), Amherst, MA.
[15] Berkhofer, *The White Man's Indian*, 30.
[16] Alan Trachtenberg, *Shades of Hiawatha: Staging Indians, Making Americans, 1880-1930* (New York: Hill and Wang, 2004), 13-16.

民の知恵を学び、「インディアンを演じ」始めたりします（図５参照）[17]。都市部に住む中上流家庭の白人は、荒野をたくましく生きた先住民から自主独立の生活手段を学ぶことで、急速に近代化、都市化する社会において見失いがちな自立心を取り戻そうとしたわけです[18]。

先住民の伝統文化に対する関心はまた、「失われつつある」文化を収集、保存、展示しようとする動きも生み出します。人類学者は、失われてゆく先住民の文化、慣習や歴史の記録のために、先住民の伝承や先住民の工芸品を収集し始めます。個人レベルでも、収集家や観光客たちは、新しく完成した鉄道とその流通を利用して、多様な先住民の手工芸品を手にするようになります。そしてこれらの手工芸品は、他の異国の手工芸品と同じように、白人の中、上流家庭の自宅の一室あるいは「居心地の良い部屋の片隅（cosey corner）」にオリエンタルな見世物として飾られるようになるのです[19]。

つまり、この頃、白人は、自分たちにとって都合の良い「インディアン」を思い描き、その表象を利用していたのです。そのイメージは西部の手つかずの自然、荒野にいる「消えゆく先住民」であったりしました。そうした中でも、彼らは実際には先住民の「同化」を望んでいたというわけで、この時期の先住民表象は、プリミティブな「インディアン」、そして文明化した「インディアン」という、一見相反するかのような２つのイメージが並存していたのです。

しかし、実際に 20 世紀転換期を生きた先住民は、こういった大衆社会のイメージの型にはまることはありませんでした。20 世紀転換期、保留地内の昼間学校や寄宿学校、そして保留地外寄宿学校において「同化」教育を受けた先住民たちは、英語の読み書きを習得することでコミュニケーション手段を得て、英語でアメリカ社会や先住民の抱える問題について自らの意見を発信、さらには批判までしていきます。「消えゆくインディアン」に対する関心の高まりと「同化」教育を通して得た知識や英語は、先住民に逆に、アメリカ社会で先住民として、アメリカ人として生き抜き、抵抗する手段を与えることになったのです[20]。

イーストマンとデコラは、同化教育を通して英語の読み書きを学び、アメリカ先住民に対する主流社会の期待も学んだ人々です。彼らは、彼らの自伝や、先住民や白人の子供への教

---

[17] Deloria, *Playing Indian*. 図 5 はチャールズ・イーストマンと共に「インディアン」を演じる白人男性の姿を捉えている。Photographer Unknown, Dr. Charles A. Eastman (Charles Alexander Eastman/Ohiyesa), Washpetonwan Dakota(Wahpeton Sioux), 1858-1939, Photographed at the Birth of Chicago Pageant in 1933?, P21884, National Museum of the American Indian, Washington DC., accessed on February 20, 2018, http://collections.si.edu/search/detail/edanmdm:NMAI_303994?date.slider=&q=Eastman%2C+Charles&fq=online_media_type%3A%22Images%22&dsort=&record=8&hlterm=Eastman%2C%2BCharles&inline=true.

[18] 先住民の知恵を学ぼうとする白人のこうした姿勢は、Woodcraft Indians (後の Boy Scouts of America)の創立者である Ernest Thompson Seton の著書からも読み取ることができる。Ernest Thompson Seton, *The Gospel of the Red Man: An Indian Bible* (1936; reprint, San Diego: The Book Tree, 2006).

[19] Kristin L. Hoganson, *Consumer's Imperium: The Global Production of American Domesticity, 1865-1920* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2007); Elizabeth Hutchinson, *The Indian Craze: Primtivism, Modernism, and Transculturation in American Art, 1890-1915* (Durham: Duke University Press, 2009), 19.

[20] Amelia V. Katanski, *Learning to Write Indian: The Boarding-School Experience and American Indian Literature* (Norman: University of Oklahoma Press, 2005); K. Tsianina Lomawaima and Teresa L. McCarty, *To Remain an Indian: Lessons in Democracy from a Century of Native American Education* (New York: Teachers College Press, 2006); Clifford E. Trafzer, Jean A. Keller, and Lorene Sisquoc eds., *Boarding School Blues: Revisiting American Indian Educational Experiences* (Lincoln: University of Nebraska Press, 2006).

育を通して、「インディアン」を演じ、彼ら自身の考える「インディアンらしさ」の意味を積極的に模索し、その「インディアンらしさ」を再定義します。そして、その「インディアン」を通して主流社会に働きかけるのです。

4. チャールズ・イーストマン(Charles A. Eastman)[21]

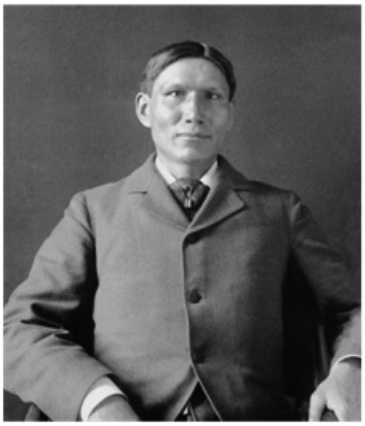


図 6 .イーストマンのポートレート写真

イーストマン（図 6 参照）[22]はおそらく、この時期の先住民作家として一番有名な人物なのではないかと思います。彼はダコタ族出身の医者ですが、医者としては成功できず、作家、講演活動、そして先住民の知恵の伝道師として身を立てた人物です。彼の先住民観について考察する前に、まずはイーストマンがどのような人物かどうかを紹介したいと思います。

イーストマンは、今のミネソタ州のレッドウッド・フォールスの近くにある、ダコタ保留地で 1858 年に生まれました。しかし、イーストマンは幼少期のほとんどをカナダのマニトバ州で過ごすことになります。何故ならば、ダコタ族は 1862 年のダコタ戦争の結果により、ミネソタ州の土地を追われたからです。母はイーストマンを生んですぐになくなり、父、メニー・ライトニング（Many Lightning）はダコタ戦争時に捕虜として捕らわれ、絞首刑にあったと聞かされていました。実は父は刑務所に入れられ生きていたのですが。

このイーストマンは小さいころから、ダコタ戦争で捕らわれ亡くなった父や他の親族たちの復讐をするために、狩猟者と戦士になることを夢見て、祖母や伯父から教育を受けていました。この彼の夢が変化したのは、殺されたと聞かされていた父、メニー・ライトニングが、ジェイコブ・イーストマン（Jacob Eastman）として彼の眼の前に現れた時でした。父は、イーストマンに対して刑務所に収容されていた時にキリスト教に改宗したことや、サウスダコタ州のフランドローにある彼の土地で生活をし始めたので、イーストマンをそこに連れて行きたいと話します。すでに殺されたと思っていた父が、キリスト教に改宗し、「文明化」した生活を受け入れていることに最初は戸惑ったイーストマンですが、父に説得され

---

[21] 本セクションは拙著の博士論文の第 1 章および『同志社アメリカ研究』に掲載された紀要論文の内容をまとめ、日本語にしたものである。Yamamoto(Jimura), “Truly Indian…Truly American,” 20-44. および Miyuki Jimura, “The Indian as the American Savior: Charles Alexander Eastman’s Indian and his Vision for America’s Future,” *Doshisha American Studies* 48 (2012): 53-75 を参照。

[22] Photographer Unknown, Delegation, 1897, BAE GN 03462A 06583800, National Anthropological Archives, Smithsonian Institution, accessed on February 18, 2018, http://collections.si.edu/search/detail/edanmdm:siris_arc_14493?date.slider=&q=Eastman%2C+Charles&fq=online_media_type%3A%22Images%22&dsort=&record=7&hlterm=Eastman%2C%2BCharles&inline=true.

て彼も「文明化」を受け入れることに決めます[23]。そして、彼はまずフランドロー・ミッション・スクールに通い、その後 1890 年にアメリカ東部でボストン大学のメディカルスクールを卒業しました。そしてまずは 1890 年秋からサウスダコタ州のパインリッジ保留地で、ラコタ族の人々の内科医として働くことになります。そこで、白人女性のエレイン・グッデール（Elaine Goodale）と出会い結婚します。

イーストマンは1893年から、生活をしていくために執筆活動に取り組むことになります。執筆活動ができたのはひとえに、すでに執筆活動をしていた妻のおかげでした。妻の協力もあり、イーストマンは、先住民が実は広いアメリカ社会において、尊敬されるべき美徳を持ち合わせているのだ、と、当時、消えゆく先住民の伝統文化を賛美しようとする動きを利用して主流社会に語りかけるのです。そして、作品中で彼は、森の中で生きながらも近代社会でも生きることができる先住民としての自分を提示します。

図７. *The Soul of the Indian* のイーストマン

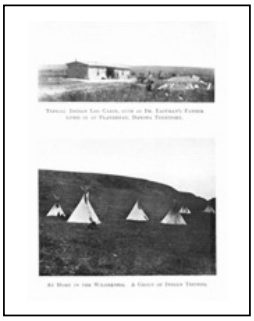
ではイーストマンがどのようにして作品の中で自分を演出したのかを見ていきたいと思います。まずこの写真を見てください。

この写真は「インディアンのたましい（*The Soul of the Indian*）」の冒頭に挿入されたイーストマンの写真です（図７参照）[24]。ここで彼は羽根飾りを身に着け、上半身の肌を露出しています。背景は暗いです。そして、左上の、光の方向を見上げています。唇は少し笑っているように思います。そして、タイトルにあるように、彼はビジョン・クエスト、つまり精霊たちとコミュニケーションを取っているかのようなかたちでポーズをとっています。これは、「インディアンのたましい」で彼自身が語る、「白人に出会う前の」先住民の思想が「本物」であると読者に感じさせるために、イーストマンが装った「プリミティブな」「インディアンらしさ」ではないかと思います。また、彼が装う「本物の」インディアンは、「インディアン・ボーイフッド（*Indian Boyhood*）」の最初の文からも読み取れると思います。彼は、インディアン・ボーイフッドの最初の文で、このように言っています。What boy would not be an Indian for a while when he thinks of the freest life in the world? This life was mine.（世界で一番自由な生活を考える時、どんな少年がしばらくインディアンになろうと思わないだろうか？　この生活は僕のものだった）と[25]。ここで「世界で一番自由な生活」が「自分のもの」だったと、所有格を使うことで、イーストマンはこの、自分の幼少期の自然で、

---

[23] Charles A. Eastman, *From the Deep Woods to Civilization: Chapters in the Autobiography of an Indian* (Boston: Little, Brown and Company, 1916), 7.
[24] Frontispiece in Photogravure. Charles A. Eastman, *The Soul of the Indian: An Interpretation* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1911).
[25] Charles A. Eastman, *Indian Boyhood* (New York: McClure, Philips & Co., 1902), 3.

自由な生活、そして自分がこれから語るその生活が、オーセンティックな、本物の「インディアン」の経験なのだと読者に確認するのです。ここで、また、過去形を使うことで、イーストマンは主流社会による「消えゆく先住民」に対する哀愁をうまく利用して、読者の興味を誘っています。でも、「インディアンのたましい」の写真で、彼のうかべているほほ笑みなどは、先住民が消えゆくイメージを感じさせません。エドワード・カーチス(Edward Curtis)等、同時代に取られた、記録的な先住民の写真とは何か違う、面白い写真です。



しかしその一方で、イーストマンは、彼の他の自伝「深い森から文明へ（*From the Deep Woods to Civilization*）」で、白人社会にうまく同化したインディアンも演出しています。この写真は「深い森から文明へ」の最初に挿入されたポートレート写真ですが、今度は、イーストマンは、暗い背景の前で、暗い色のスーツに身を包み、右を向いて座っています（図８参照）[26]。この肖像は、今度は荒野に住む「野蛮な」荒々しいインディアンのイメージとは正反対の、シヴィリティ（礼儀正しさ）やジェンティリティー（上品さ）が感じられるような写真になっています。また、「深い森から文明へ」に挿入された他の写真にも、彼が「深い森から」「文明」に入り、「文明化」したインディアンになったことを読者に確信させるような演出が見られます。例えば、イーストマンは、ティピーの写真とログキャビンの写真を同じ場所に入れています（図９参照）[27]。この２つの、ティピーとログキャビンは同じような荒野に建てられていますが、違うのは、ログキャビンの写真には土地利用の形跡が見られるということです。この写真をティピーの写真と並べ、読者に対比させることで、イーストマンは、彼の父が白人の生活様式を受け入れたその従順さを表し、読者に彼の「野蛮な」インディアンから「文明的な」人間への変化が成功であったということを可視化して確認させたのではないかと思われます。

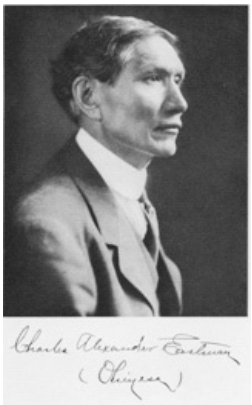


図８. *From the Deep Woods to Civilization* のイーストマ

では、イーストマンはなぜこのように「野蛮」と「文明」を可視化し、自分が「文明」サイドにいるかのように装ったのでしょうか。イーストマンは、「文明化した」インディアンを演じることで、その当時あった、先住民は白人と比べて「劣等な民族」であるのですぐには主流社会に「同化」することはできず、白人のサポートが必要だという考えに対抗したのです。そして、自分や自分の父親を例に挙げてこのステレオタイプを非難します。イーストマンは、多くの人々が「一世代では、無教育の野蛮な人間の手が文明には届かない」と考えていたが「私の父は 2000 年あるいは 10 年もかけずにその（文明の）根本的な特徴を理解

[26] Frontispiece in Photogravure. Eastman, *From the Deep Woods*.
[27] Ibid., 16.

したし、彼は一日も学校に行ったことはないが、寛大で誇りある市民として生きた。私は専門家のレベルに達するようになるまで約 15 年かかったが、それからずっとそのレベルにいるのだ」と言っています[28]。また、第 26 代のアメリカ大統領のセオドア・ローズベルト（Theodore Roosevelt）や、当時の有名な心理学者であり教育者である G.スタンリー・ホール(G. Stanley Hall)、ボーイスカウトアメリカ連盟の創立者であるアーネスト・トムソン・シートン(Ernest Thompson Seton)などの名前を挙げることで、イーストマンは読者に、自分が自立しており、すでに「白人文明」の一員であり、主流社会に参加する能力を有しているということを示します[29]。

そして、イーストマンは「インディアン」であり「アメリカ人」として主流社会に彼の意見を投げかけます。では、彼が考えた主流社会の問題は何であり、彼はどのように先住民を描いたのでしょうか。これから明らかにしていきたいと思います。

イーストマンは自身の自伝「深い森から文明へ」においては「同化」した先住民の自分について書きました。また、「今日のインディアン」においても、痛烈に「同化」した先住民として、連邦政府の先住民政策を批判し、保留地に住む先住民の抱える問題を明るみに出します。しかしその一方で、他の多くの著作において、イーストマンは主流社会が求めるようなプリミティブな「インディアン」の知恵を紹介します。イーストマンが、このようなプリミティブな「インディアン」ヒーローの知恵を紹介したのは、彼がその知恵が実は、急速に近代化し、都市化するアメリカ社会が抱える問題の解決策となり得ると考えていたからでした。

先に述べたように、20 世紀転換期のアメリカにおいて、急速な工業化や都市化に直面し、自らが「文明化しすぎた」と感じた人々は、それとは対照的な「荒野に住む力強く男らしい」先住民やカウボーイにあこがれを抱くようになります。急激な都市化や近代化がもたらす問題の一つに挙げられたのはいわゆる“the boy problem”というもので、少年犯罪が増加し、少年たちの間で道徳や、身体的な強靭さが失われていることに対する危惧です。

そこで、後のボーイスカウトアメリカの創始者シートンなどが出てくるようになります。シートンも近代の都市生活が「強靭で、男らしく、自立的な男子」を「神経衰弱で活力のない胸が平らな喫煙者」にしてしまうと不安を打ち明けています[30]。では、そうならないためにどうすればよいのか。シートンはそこで、プリミティブな野生を生きる「インディアン」

---

[28] Charles A. Eastman, *The Indian To-day: The Past and Future of the First American* (New York: Doubleday, Page & Company, 1915), 100. 実際には、イーストマンが教育を受けた期間は 17 年であった。それでもその期間は、イーストマンによると「平均的な白人の若者が必要とする期間よりも 2 年も短い」期間だったそうである(*The Indian To-Day*, vii)。

[29] Eastman, *From the Deep Woods*, 192; Peter L. Bayers, “Charles Alexander Eastman’s *From the Deep Woods to Civilization* and the Shaping of Native Manhood,” *Studies in American Indian Literatures* 20, no. 3 (Fall 2008): 59. イーストマンは先住民の市民権を擁護したアメリカ・インディアン協会（The Society of American Indians）の一員であった。イーストマンが、自らを「白人文明」の一員で自立した人間であると演出したのは、白人読者に、先住民を米国の「市民」として認めさせたかったからだと考えられる。

[30] Ernest Thompson Seton, *Boy Scouts of America: A Handbook of Woodcraft, Scouting, and Life-craft* (New York: Doubleday, Page & Company, 1910), xii, accessed on November 29, 2015, https://archive.org/stream/boyscoutsofameri00seto#page/n13/mode/2up.

にその解決策を見出しました。伝統的なインディアンの知恵が、少年たちの自立心を育てるのではないかと考えたのです。

イーストマンはその知人として、ボーイスカウトアメリカの書記としてもシートンの活動に関わることになります。そして、イーストマンは、「本物」のインディアンとして、物質的な「白人文明」での生活に対して伝統的な「インディアン」のシンプルな生活を、読者に対して示したのです。イーストマンは特に先住民の「さすらいの野外生活」が、「身体的な卓越と強靭さ、そして忍耐力と活力」を維持するのに不可欠であると考えていました[31]。そして、「本物の」インディアンであるイーストマンが先住民の知恵を伝授する、というキャッチコピーのもと、白人の子供対象のサマーキャンプを独自に企画し、開催するのです。

イーストマンは、サマーキャンプで、白人の子供たちに自然の中で過ごすことで「自然の法則を遵守し、健全な身体をつくり、注意深く、そして批判的な思考を維持する[32]」ことができるようにしました。彼が教えたのは、男の子で言えば例えば「足跡や身振りの言語、インディアンの合図、木をこする火のつけ方、住まい作り、野外クッキング[33]」などでした。これらはイーストマンが小さいときに祖母や伯父から受けた教育がベースになっており、これらのトレーニングを通して、イーストマンは子供が見失いつつある自立心をもう一度取り戻せると考えていたのです。特に男の子は、そういったトレーニングを通して、「探検者やヒーローの天賦の精神、つまり男でありたいと切望[34]」するようになるだろうとイーストマンは論じました。

その一方で白人の女の子に対しては、イーストマンは女性として、「子供の精神的な師となり、情け深い養育者[35]」となるべく指導をします。何故なら、イーストマンは、母になり子供を育てることが女性の存在意義のひとつだと考えていたからでした。イーストマンが女の子向けのキャンプの方を優先して開催したのはおそらく、参加者の女の子たちが、将来的に母親となることを想定していたからかもしれません。そして、彼女たちが将来的にアメリカ市民の母として“the boy problem”のような問題を抱える「白人文明」を救う「精神的な師」になると考えていたからかもしれません。そのために、女の子向けのプログラムは、男の子と同じプログラムに加えて家事育児を想定したようなプログラムが組まれていました。例えばイーストマンは「赤ん坊の夜泣きを止める」方法や「フライパンなしでステーキを料理する」方法を指導しています[36]。イーストマンは、民族を「道徳的に救済」する役割を女性が担っていると考えていました[37]。したがって、イーストマンは母親としての役割を担い文明を救う、という女性の重要な役割を先住民の視点から再定義し、そしてアメリカの更な

---

[31] Eastman, *Indian To-Day*, 5-6.
[32] Ibid.
[33]“OHIYESA (the Winners)—A Camp For Boys” (promotional brochure, 1917) Goodell/Goodale Family Papers, Jones Library Special Collections, folder: Charles A. Eastman, 4-5.; Charles A. Eastman, *Indian Scout Talks: A Guide for Boy Scouts and Camp Fire Girls* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1911), 189.
[34] Eastman, *Indian Scout Talks*, 7.
[35] Eastman, *Indian To-Day*, 88.
[36]“Training American Girls as Indian,” *Boston Sunday Post*, 20 June 1915.
[37] Eastman, *Indian To-Day*, 88.

る発展のための理想のジェンダー・ロールを白人の子供の教育を通して再確認したのです。

これらからうかがい知ることができるのは、イーストマンが「本物の」インディアンとして自然の中で自由に生きる「インディアン」を白人の子供相手に演じ、先住民の知恵を白人の子供たちに伝授したこと。そして、急速な都市化と工業化で問題を抱える「白人文明」を救う手段として、彼が受けたダコタ流の教育に基づく「インディアン」の知恵を「白人文明」に浸透させようとしたことではないかと思います。イーストマンは主流社会によるインディアンへの関心を利用し、彼が昔受けた教育を主流社会が抱える問題の打開策として白人の子供に教えることで、自らのサヴァイヴァンス、そして先住民全体のサヴァイヴァンスを目指したのではないかと考えられます。

6. エンジェル・デコラ（Angel De Cora）[38]

さて、イーストマンは同化教育を受けたインディアンとして英語を利用し、「本物の」インディアンを演じることで、「本物の」インディアンの伝授する先住民の知恵を人々に提供しました。そして、デコラ（図 10 参照）は先住民でありながら寄宿学校の教師として、自身の先住民観に基づいて、ネイティブ・アートのプログラムを創設します[39]。これから、デコラがイラストを通して演じたインディアンと、彼女がネイティブ・アートのプログラムを創設することによって目指したものについて話したいと思います。

図 10. デコラのポートレート写真

デコラは 1871 年にウィネベーゴ族のチーフの孫として、今日のネブラスカ州サーストンの近くの保留地のウィグワム（wigwam）の中で生まれました。デコラが生まれた頃、ウィネベーゴ族の生活はすでに著しく変化していました。何故なら、その頃までにウィネベーゴ族は、今日のウィスコンシン州とイリノイ州の北部にまたがる広大な居住地を追われ、1865 年にネブラスカ州の居留地に落ち着くまでに、何度も強制移住させられていたからです[40]。したがって、デコラが子供の頃に経験した文

[38]本セクションは拙著の博士論文の第 3 章の内容と日本語で著した紀要論文をベースにまとめたものである。Yamamoto(Jimura), “Truly Indian…Truly American,” 74-99 および、地村みゆき「再びインディアンになるために—20 世紀転換期米国における先住民寄宿学校教育と先住民教師エンジェル・デコラの取り組みについて—」『言語と文化』37 号（2017 年 7 月）、39-60 頁を参照。

[39] Photographer Unknown., Angel De Cora, Wikipedia Commons, accessed on February 20, 2018, https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Angel_De_Cora.jpg.

[40] 1829 年、1832 年、1837 年と 1855 年に締結された条約と 1862 年のダコタ戦争の結果、ウィネベーゴ族は数度にわたりアイオワ州、ミネソタ州、サウスダコタ州、ネブラスカ州の各地に移住を強いられ、居住地を転々とさせられた。ウィネベーゴ族はダコタ戦争には介入しなかったが、ミネソタ州政府はダコタ戦争を口実にウィネベーゴ族の強制移住を求めたのである。エイミー・ローントゥリー（Amy Lonetree）によると、現在のネブラスカ州のウィネベーゴ保留地の居住者だけが強制移住を生き延びたウィネベーゴ族の子孫というわけではない。それぞれの強制移住の際に、もとの居住地に逃げ帰り、保留地外に住みついた人々もいた。Amy Lonetree, “Visualizing Native Survivance: Encounters with my Ho-Chunk Ancestors in the

化慣習は、数々の強制移住を経てもなお保たれ伝えられてきたわずかなものだったと言えると思います。それでもデコラは自伝に、獲物を追い季節移住しながら、狩猟と農業に従事する人々の伝統的な生活を鮮明に描いています[41]。例えば、彼女は幼いときに伝統的なダンスの儀式や病気の治癒を祈祷する儀式に参加しました[42]。また、彼女は指導者の孫として先祖が代々にわたって語り、受け継いできた慣習や行動規範を毎日学んでいました。この学びを通して彼女は、「祖父母が用意した前途有望な道」を歩んでいたといいます[43]。

しかし、この家族との平和な生活は、1883 年にデコラが寄宿学校に収容されることで突然終わりを告げます。ある日デコラは誘拐され、数日間蒸気機関車に揺られ、ヴァージニア州ハンプトンにあるハンプトン農業師範学校まで連行されました[44]。グーグルマップで調べてみると、現在のネブラスカ州サーストンに位置するウィネベーゴ保留地からヴァージニア州ハンプトンまでは、約 2070km あり、小さな少女であったデコラがどれだけ辛い経験をしたか分かります。

デコラはそれからの人生のほとんどをアメリカの東部で過ごすことになります[45]。ハンプトン卒業後、デコラはマサチューセツ州西部にある女子校であるバーナム・クラシカルスクール、スミス大学、フィラデルフィアのドレクセル・インスティチュートや、ボストンのコールズ・アート・スクールで、絵画と本の口絵や挿絵に使われるようなイラストの手法を学びました[46]。それからデコラはボストン、後にニューヨークにスタジオを開き、先住民にまつわる書籍が出版される際に表紙や口絵を描くイラストレーターとして働き始めます。

デコラにとって、誘拐され強制的に入学させられた寄宿学校での生活は辛い経験であったに違いないと思います。デコラはハンプトンでの生活について詳細な記録を残していないのですが、他の先住民の生徒が残した記録を読み解くに、13 歳のデコラは同じように「厳

Family Photographs of Charles Van Schaick," in *People of the Big Voice: Photographs of Ho-Chunk Families by Charles Van Schaick, 1879-1942*, eds. Tom Jones, Michael Schmudlach, Matthew Daniel Mason, Amy Lonetree, and George A. Greendeer (Madison: Wisconsin Historical Society Press, 2011), 15-20.

41 Angel De Cora, "An Autobiography," *The Red Man*, March 1911, 279.

42 McAnulty, "Angel DeCora," 144-145; Angel De Cora, "The Sick Child," *Harper's New Monthly Magazine* 98 (February 1899): 446-448; Angel De Cora, "Grey Wolf's Daughter," *Harper's New Monthly Magazine* 99 (November 1899): 860-862.

42 De Cora, "An Autobiography," 279.

43 Ibid.

44 1893 年のハンプトン農業師範学校の記録によると、デコラは 1883 年 11 月 2 日にジュリア・サンシール（Julia St. Cyr）によって 3 人の子供と一緒にネブラスカ州にあるウィネベーゴ居留地からハンプトンに連れてこられたとある。*Twenty-Two Years' Work of the Hampton Normal and Agricultural Institute at Hampton, Virginia: Records of Negro and Indian Graduates and ex-Students* (Hampton: Hampton Normal School Press, 1893), 403.

45 保留地外の寄宿学校で 5 年間を過ごした後に学生を故郷に戻すという政府の規定によって、デコラは 1887 年に保留地に戻ることが許可され、約 1 年保留地に滞在することになる。その間に父親と祖父が亡くなり、彼らの死を「古い、伝統的なインディアンの生活」の終焉と捉えたデコラは、ハンプトンに戻ることを決意したという。そして、保留地に残された人々のためになることと信じて、さらに教育を受けることを決める。McAnulty, "Angel DeCora," 147; De Cora, "An Autobiography," 280.

46 デコラはスミス大学において風景画で有名なドワイト・トライオン(Dwight William Tryon)に師事した。1896 年に大学を卒業してから彼女が師事した芸術家は、ハワード・パイル(Howard Pyle)、ジョセフ・デキャンプ(Joseph DeCamp)、フランク・ベンソン(Frank Benson)、エドモンド・ターベル(Edmund Tarbell)らである。Ann Ruggles Gere, "An Art of Survivance: Angel DeCora at Carlisle," *American Indian Quarterly* 28, no.3&4(Summer&Fall 2004): 657-658; McAnulty, "Angel DeCora," 147.

しい罰や孤立、伝染病や自身の部族の伝統文化に対する継続的な攻撃」に直面し、ホームシックになっただろうと推察できます[47]。しかし、デコラはこのハンプトンでの経験を通して、失われつつあった先住民の伝統を用いて、白人が先住民に対して抱くイメージを利用し操る手段を得ました。例えば彼女は、ハンプトンを卒業した後、恩師にユーモアを交えてこう書いています。「インディアン(Injun)がダーウィンを読むなんてやりすぎだと思うかしら」と[48]。彼女は、「野蛮な」インディアンであるにも関わらず、ダーウィンの進化論を学んでいる自分の姿を回想し、それを面白いと感じたのです。このコメントは、彼女が先住民に対する主流社会の期待を認識しており、その期待をレトリックとして利用する可能性を示唆しています。

先住民を題材とする書籍のイラストレーターとしてデコラが手掛けたもので代表的なものは、オマハ族のフランシス・ラフレッシュ（Francis La Flesche）による *The Middle Five: Indian Boys at School* (1900)や、ラコタ族のジトカラサ（Zitkala-Sa）が書いた *The Old Indian Legends* (1901)、白人の民族学者のナタリー・カーティス（Natalie Curtis）によってしるされた *The Indian's Book* (1907)です（図 11 を参照）[49]。これらの書籍にデコラは先住民の描く「本物の」イラストを提供し、先住民に対する主流社会の期待を操ります。

図 11. デコラが手掛けたイラストレーション

そして、デコラはこれらのイラストを描くことによって地位と名声を得ました。彼女に期待する声は、彼女が教師として採用された後に書かれた *Minneapolis Journal* のこの記事からも読み取れます。「アールヌーボーの客間にうんざりしているなら、その客間をエンジェル・

---

[47] David Wallace Adams, "Beyond Bleakness: The Brighter Side of Indian Boarding Schools, 1870-1940," in *Boarding School Blues*, eds. Trafzer, Keller, and Sisquoc, 35.
[48] Angel De Cora to Cora Mae Folsom, Nov. 27, 1892, Angel De Cora Student File. Hampton University Archives (hereafter HUA), Hampton, VA.
[49] 図 11 左から Cover. Francis La Flesche. *The Middle Five: Indian Boys at School* (Boston: Small, Maynard & Co., 1900); Cover. Zitkala-Sa, *Old Indian Legends* (Boston: Ginn&Company, Publishers, 1901); Cover. Natalie Curtis, *The Indian's Book* (New York: Harper and Bros., 1907).

デコラにウィグアムに変えてもらうように頼むと良い[50]」と書くこの記事は、ウィグアムで生まれたデコラが白人の教育を受けて身を立てるようになったこと、そして今カーライルで教師として教えていることを明記し、自分の客間にオリエンタルな「インディアン」らしいものを置きたい読者の関心を惹きつけます。デコラはカーライルで教育を受けたわけではないので情報がちょっと間違っているのですが。しかし、ここでは、デコラは教育を受けた「本物」の先住民でありイラストレーター、そして教師として、自分の客間を「インディアン」化したい読者を満足させることができる逸材として描かれているのです。

こうした期待を一身に受けたデコラは、カーライル・インディアン工業学校で今度は先住民の子供が主流社会のイメージを利用し、自らのサヴァイヴァンスにつなげることができるような手段を教授することになります。その手段とは先住民の手工芸品を作る技術であり、主流社会にとって「インディアンらしい」デザインを描く技術でした。デコラは、カーライル・インディアン工業学校でネイティブ・アートのプログラムの創設にかかわります。その過程で、デコラは独自の先住民観に基づき「インディアンらしい」デザインを定義し、先住民の子供たちにそれを伝えていくのです。では、これからデコラのネイティブ・アートのプログラムがどのようなものだったかを見ていきたいと思います。

デコラを寄宿学校教師として任命したのは、1906 年当時にインディアン局長官であったフランシス・ループ(Francis Leupp)です。それまで徹底した「白人文明」を規範とした「同化」教育を目指していた保留地外の寄宿学校で、ネイティブ・アートのプログラム創設が認められたのは、先ほど説明したように、先住民の伝統文化や手工芸品への関心の高まりがあったからでしょう。学校において生徒が製作する工芸品は、寄宿学校運営の重要な資金源になると考えられていました。その一方で、イーストマンが自分の例を挙げて反論したような人種差別的な考え方もプログラム創設に貢献していたともいえます。つまり、「野蛮」で「劣等」な先住民の文化はより「優れた白人文明」を前に、いずれ失われるので、先住民の文化慣習を容認しても学生の同化のプロセスの支障にはならないと見なされていたのです。連邦政府はこの頃、大衆の先住民への関心の高まりを受け、積極的にその「消えゆく先住民」の伝統文化の保存活動に介入し始めました。そして、1907 年には、生徒の美術作品制作と展示の場として、カーライル・インディアン工業学校の敷地内に建てられたループ・インディアン・アート・スタジオでは、保留地で作られた先住民の手工芸品も販売されました。

このようなネイティブ・アートを学ぶことに対する「容認」は、デコラに教師として活動する場と機会を与えました。そして、デコラは先住民である自分を利用して、ネイティブ・アートのカリキュラムを作りあげます。

しかしながら、デコラがカーライルにおいて教師になることは、先住民でありながらも同化教育の担い手として、デコラがループら政策決定者の思惑通りに利用され得るという危険性を孕んでいました。デコラは、先住民をまさに「同化」しようとする白人の試みの中心教育機関に身を置いていたわけです。けれども、デコラがループのオファーを簡単には受け

[50] *Minneapolis Journal* June 11, 1916, Smith College Archives, Northampton, MA.

入れず、オファーを受けるのに条件を付けていたというところから、彼女がカリキュラム作成上の主導権を握ろうとしていたことが伺えます。デコラがループに提示した条件は、彼女に白人の教育方法で教えることを求めないこと、そして「彼女自身の民族の芸術を発展させるために、完全な自由を彼女に与えること[51]」でした。

デコラは彼女自身の先住民観に基づいてネイティブ・アートのカリキュラムを組み直し、それぞれの部族で用いられたデザインのパターンを分析し、それらを標準化していきます。デコラは今まで西洋美術の手法の指導しかしてこなかった従来のカーライルの教育を批判します。その代わりに、デコラは先住民が伝統的に製作してきた「ビーズ細工や陶磁器、籠細工等に見られるような古い象徴的なデザインや形」の指導を新カリキュラムにおける学習の基本として採用しました[52]。そして、決まったデザインの形を手取り足取り指導する西洋的なカリキュラムとは対照的に、新カリキュラムにおいて生徒が自らの想像力を働かせ、自由に作品を創造できる環境を作りだします。そして、彼女は生徒が自由に生み出した作品を分析し、先住民の様々なデザインのパターンを探り、標準化し、彼女自身の先住民観に基づき、「先住民らしい」デザインの再定義を行うのです。

彼女独自の先住民観は、彼女がナタリー・カーティスの *The Indian's Book* にあしらった装飾文字から読み取ることができます（図 12 参照）。デコラは先住民を一つの民族ではなく、様々な背景を持つ部族の集まりとして捉えていました。そして、それぞれの部族が描くデザインの特徴を尊重しました。例えばこのクワキートル族の表紙絵を見てください。この表紙絵には、クワキートル族出身の人があしらったハイイログマとシャチのイラストが描かれていますが、デコラはこのイラストに合うように、「クジラの尾やヒレ、タカ」などのデザインを採用して文字のデザインをしています[53]。南西部の先住民のページでは、プエブロ族の陶器のデザインを真似したジグザグのラインを用いて文字を装飾しています[54]。ここからうかがい知れるのは、デコラが先住民の多様なデザインを尊重することで、先住民の特徴を軽視し、ひとくくりに先住民を「インディアン」として捉える考え方に対抗したということです。

---

[51] Linda M. Waggoner, *Fire Light: The Life of Angel De Cora, Winnebago Artist* (Norman: University of Oklahoma Press, 2008), 132.
[52] Mrs. William Dietz [Angel De Cora], "Native Indian Art," *Report of the Twenty-Sixth Annual Meeting of the Lake Mohonk Conference of Friends of the Indian and Other Dependent Peoples* (Mohonk Lake, NY: The Lake Mohonk Conference of Friends of the Indian and Other Dependent Peoples, 1908), 18.
[53] Curtis, *The Indian Book*, 295.
[54] Ibid., 307.

図 12. *The Indian's Book* でデコラが手掛けた修飾文字

したがって、デコラは、イーストマンが自分の受けてきたダコタ流の教育を「インディアン」の知恵として宣伝したのとは対照的に、部族のそれぞれの特徴を先住民の美術として取り入れました。そして、必要であれば柔軟に、ペルシャの手法等、他の民族の手法や技術をそのデザインに取り入れ、さらにそのデザインに磨きをかけようとしました[55]。その一方で、デコラは、彼女の考える先住民らしさにそぐわないデザインはやめるように勧めています。したがって、デコラは先住民教師として「本物の」インディアンを演じながら、自分の先住民観に基づき、「先住民らしい」デザインとして何を保存し存続させるべきかを取捨選択したのです。

このように、デコラは先住民のアーチストでありながら、「同化」教育の担い手である教師として、自身の先住民観に基づき再定義した「インディアンらしい」デザインを生徒に教えます。その指導を通してデコラが目指したのは、生徒の芸術センスを目覚めさせ、経済的な自立を促すことでした。長年にわたる「同化」教育によって、先住民を「劣等」とする西洋的な人種ヒエラルキーを植え付けられてきていた生徒たちは、当初デコラのネイティブ・アートのプログラムにあまり関心を寄せなかったようです。また、自分の出身ですらも忘れてしまった生徒もいました。したがって、デコラはまず、「同化」教育で生徒が失った先住民としての誇りや伝統文化を、彼女の授業を通して呼び起こそうとします。そのために彼女が用いたのは、アメリカ民族学局の報告や人類学者のフランツ・ボアズ（Franz Boaz）やアルフレッド・クローバー（Alfred Kroeber）による研究でした[56]。彼女が白人の人類学者の研究を教材として利用したのは、プログラムの資金不足によるためだと考えられています。しかし、これはまた、デコラが「消えゆく先住民」のイメージに後押しされ、活発に白人が収集、分類、体系化した研究を逆に利用したと受け止めることもできると思います。彼女はたとえば、自分の出身を忘れてしまった生徒と一緒にボアズの著書を読み、その生徒の出身はどこか突き止めました[57]。また、人類学者を招いて先住民やモチーフやデザインのレクチャ

---

[55] Angel De Cora, "Native Indian Art," *The Indian School Journal* 7 (September 1907): 45.
[56] McAnulty, "Angel DeCora," 21.
[57] Angel De Cora, "An Effort to Encourage Indian Art," *Couge's Interrational des Americanistes*, Vol. II (Quebec: Dussault and Proulx, 1907): 208.

ーを生徒に対して行ったりもしています[58]。要するに、デコラは白人の人類学者の研究を、生徒のサヴァイヴァンスに利用したのです。

また、デコラはアーチストとしての自らの経験からも、先住民のデザインに需要があることを熟知していました。1914 年のクリスマス前のある日、デコラは磁器製のブローチに、ズニ族やスー族、ナバホ族等のデザインの絵付けをすることで収入を得、「つまらないものの方がよく売れるの」と、彼女の恩師に報告しています[59]。デコラは生徒がそのようなデザインを生み出すことができるようになれば、アメリカ社会で経済的に自立して生きていく手段になると信じていました。そして、彼女は、特に生徒に家の内装や装飾品、家具、そして台所の日用品などのデザインをするように勧めました。また「れんがや石板、寄木細工やモザイク状の床、彫刻をほどこした木製家具」も、先住民のデザインを施す格好のものではないかと提案しました[60]。それらはすべて、家庭に先住民の工芸品などを集めて展示したい人々を満足させられるものでした。したがって、彼女はプログラムを通して、社会のニーズに合わせて先住民のデザインをほどこす方法を生徒に教えることで、彼女の生徒の経済的サヴァイヴァンスを可能にしたのです。

デコラがこうして生徒に先住民のデザインを教えたことは、一方で結局「同化」教育によって、先住民を低収入の単純労働者にするというループら政策決定者の教育方針を実践しかけないリスクを背負っていたと考えることもできます。要するに、先住民でありながら教師であったデコラは、先住民の職人技を生徒に教えることで、「最低限の技術で役に立つように教育を受けた」、「有用」な先住民を生み出す植民地主義的なプロジェクトに加担するという危ない橋を渡っていたのです。しかし、デコラが先住民のアートのプログラムでの指導を通して、教師として、得られた機会と力を駆使して、先住民のサヴァイヴァンスに取り組んでいたということは、今から紹介するデコラの発言からうかがい知ることができると思います。デコラは「伝統衣装を着たインディアンは過去のものだが、生来の芸術は持続するだろう」と言っています。そしてこのように続けます。「全人類がいくつかの形で彼らの放浪の歴史を大切にしてきたように、先住民も象形文字や記号の記録を存続させてきた。そして、時の流れとともに、故郷の地全体の広さから得たひらめきを描き、先住民はその象形文字や記号の記録をデザインのシステムへと進化させたのだ[61]。」デコラは「民族の永久的な記録」としての先住民のデザインを、プログラムを通して標準化し、指導し、新たな社会のニーズに適応させることで、ネイティブ・アートの存続を狙ったのです。

こうしてデコラは、主流社会の先住民への関心の高まりと、先住民教育に生まれた先住民文化慣習の実践の「容認」という機会を利用し、自身の先住民観に基づいて、ネイティブ・アートプログラムの整備を行いました。そして、「先住民らしい」デザインの再定義をしたのです。それから、プログラムの指導を通して、デコラはその「先住民らしい」デザインの

---

[58] "Dr. Gordon's Lecture," *The Arrow*, vol. 3, no.30, Friday, March 22, 1907.
[59] Angel De Cora to Cora Mae Folsom, January 18, 1915, Angel De Cora Student File. HUA.
[60] De Cora, "Native Indian Art," *Report of the Executive on the Proceedings of the First Annual Conference*, 86.
[61] Ibid., 87.

存続と普及も可能にしました。例えば彼女の教え子の、チペワ族出身のジョン・ファール（John Farr）は、その後ペンシルバニア大学で建築を学び、ニューヨークの公立図書館の建物の設計をしました。ナバホ族の学生は、南西部に帰った後に銀細工師として成功したと言います。そして、サミュエル・マクリーン（Samuel McLean）という卒業生は、ワシントン州オマックのミッション・スクールで美術教師となりました[62]。寄宿学校卒業生で出世するものは数少なく、その多くが職探しに苦労したと言われていますが[63]、その中であってもこれらの成功例は、デコラが目指したネイティブ・アートの存続と普及がある程度達成され、デコラが先住民のサヴァイヴァンスに貢献したということを示していると思われます。デコラは先住民の教師として、アメリカ社会において先住民が再び「インディアン」として、自らの持つ芸術センスと技術に誇りを持って生きていくことができるように導いたのです。

7. まとめ

まとめに入りたいと思います。これまで、イーストマンとデコラの生い立ちとそれぞれが演じた「インディアン」、そして彼らが考えた「インディアンらしさ」について明らかにしてきました。イーストマンは、自然を自由気ままに生きた本物の「インディアン」を演じ、アメリカ社会が抱える問題をプリミティブな「インディアン」の知恵が救うとして提示しました。そして、デコラは先住民教師として、先住民への関心の高まりと先住民教育の中に生まれた寄宿学校内での先住民の文化慣習を学ぶことの「容認」を利用し、自身の先住民観に基づいて芸術的な「インディアンらしさ」を再定義しました。彼らはそれぞれ、白人の期待する「インディアン」を演じることで、白人からの信用を買い、先住民が「劣等」な民族ではなく、広くアメリカ社会に貢献できる存在であることを明らかにしました。先住民が「消えゆく」民族であると考えられていた時代に生きた彼らは、これらの取り組みを通して、積極的に「インディアンらしさ」の意味を模索し再定義を行い、白人をアメリカ社会の人種的、社会的ヒエラルキーの頂点に置く世界観に異論を唱えたのです。

「インディアン」というイメージは、白人の植民地主義の産物であり、それらの歪んだ、あまりにも画一化されたイメージは、アメリカ先住民の様々な集団の特徴や文化、存在を無視するものです。しかし、それらのイメージを利用することで、20 世紀転換期を生きたアメリカ先住民が自らの考える「インディアンらしさ」を再考し、自らのアイデンティティの再定義を行ったのもまた事実だと思います。冒頭の質問に戻りますが、私はこれも“Why are Indian images everywhere?”の答えの 1 つであると思っています。

本日はこのような貴重な機会をいただき、本当にありがとうございました。

---

[62] Gere, “An Art of Survivance,” 672; McAnulty, “Angel DeCora,” 186.

[63] David Wallace Adams, *Education for Extinction: American Indians and the Boarding School Experience, 1875-1928* (Lawrence: University Press of Kansas, 1995), 292-298; Lomawaima and McCarty, *To Remain an Indian*, 50.

３．会務報告

名古屋フルブライト・アソシエーション 2018 年度総会（10 月 13 日（土曜日））

報告
1. ホームページの更新など。
2. 評議員会
3. その他

議題

1. 2017 年度（2017 年 4 月―2018 年 3 月）の事業報告
2. 2017 年度の決算報告と監査
3. 2018 年度の事業計画、予算案
4. その他

1. 2017 年度（2017 年 4 月―2018 年 3 月）の事業報告

1)2017 年7月 15 日(土)役員会、総会、講演会の開催
場所:椙山女学園大学学園センター5 階 507
役員会:午後2時 00 分―午後2時 30 分
総会: 午後 2 時 30 分―午後 3 時
講演:午後 3 時―午後 4 時 30 分
懇親会:午後 4 時半－午後 6 時半
講演会:講師:川島正樹 南山大学教授
題目:「日本人歴史家が英語で米国概説史を出版する試み」(仮)
23 名参加

2)2018 年 1 月 25 日
2017 年 1 月 10 日に名古屋フルブライト・アソシエーション会報 The Fulbrighter in Nagoya No.25&No.26 と The Fulbrighter in Nagoya No.27 をホームページにアップ。

3)2018 年2月 24 日(土)
椙山女学園大学において講演会(例会として) :午後 3 時―午後 4 時
講師:地村 みゆき フルブライト博士論文研究プログラム
2011～2012 年 ミシガン州立大学
題目:米国先住民が演じた「インディアン」
12 名参加
―Charles A. Eastman と Angel De Cora の取り組みを通して―
講演会を開催しました。
午後 5 時～7 時 懇親会を開催した。

2. 2017 年度の決算報告と監査
別紙 1 を参照

3) 2018 年度の事業計画、予算案

別紙 2
名古屋フルブライト・アソシエーション
2018 年度事業計画予算

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	0		総会案内（7 月 28 日）	23,256	
会費	90,000	3000 X 30	講師謝礼	5,000	
			サーバー・ドメイン	32,508	
			ニューズレターの発行 28 号	10,000	
			会場費	1,500	
			学生アルバイト	5,000	
			通信費	5,000	
			次年度繰り越し	7,736	
計	90,000			90,000	

財政および参加者の状況を考え、総会と例会と年に 2 回の会を開催することは極めて困難である。そこで、年に 1 回の総会、講演会のみを開催する方向で考える。「会則」によれば、「総会は毎年 1 回開催する」と規定されているだけで、例会についての規定はない。慣例と

して、総会と例会の 2 回を開催していた。今度、会が継続的に続くための変更である。

開催日程 2018 年 7 月 28 日（土）台風のため急きょ 10 月 13 日に延期
場所：椙山女学園大学学園センター5 階 507　http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/access/
総会：午後 3：00〜3：30
講演：午後 3：30〜5：00
懇親会：午後 5：00〜7：00（3000 円を予定）場所は未定

講師：木下徹　名古屋大学大学院人文学研究科 教授
（カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、1989－91）

テーマ：「脳科学と言語教育：脳画像イメージングの応用を中心に」

別紙　1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2017年度決済

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	-13,495		総会案内（86人）2017年7月	25,668	
寄付	22,535		例会（85人）2018年2月日	23,364	
会費	84,000	3000Ｘ28人			
			サーバー・ドメイン	32,508	
			The Fulbrighter in Nagoya no.27（5冊）	10,000	
			椙山女学園	1,500	
			次年度繰り越し	0	
計	93,040			93,040	

2017年度収支決済についき、領収書、預金通帳等関係書類によって監査を行った結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事　　小坂敦子　　2018年10月13日

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 １９８３年１０月 １日

改正 １９９３年 6月 5日、２００９年 5月３０日、**２０１２年１０月１４日**

第１章 総則

第１条　本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第２条　本会は事務所を名古屋に置く。

第３条　本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第４条　本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

第５条　１．正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー

２．準会員：フルブライト奨学金のグランティーで日本に滞在しているアメリカ人

３．賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

４．名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者

５．シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第２章 事業

第６条　本会は次の事業を行う。

１．会員相互の交流、親睦を深めるための活動

２．フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助

３．日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動 および滞在中の生活への指導援助

４．その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第３章 総会

第７条　総会は毎年１回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催することができる。

第８条　総会では、次の事項を行う。

１．事業報告、収支予算、決算の承認

２．役員の選出

３．その他の本会運営のための重要事項の議決

第９条　議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第４章 役員

第10条　本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条　任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第５章 会計

第12条　本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条　正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は１口　年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費 10,000円とする。

第 14 条 本会の会計年度は 4 月 1 日に始まり、翌年 3 月 31 日に終わる。

編集後記

会報　*The Fulbrighter In Nagoya* No.28 をお届けいたします。

なお、目次にありますように、2 つの講演会の内容を掲載しております。一つ目は、愛知大学経営学部助教の地村みゆきさんの「米国先住民が演じた「インディアン」―Charles A. Eastman と Angel De Cora の取り組みを通して―」2018 年 2 月 24 日（土）、というテーマで、インディアンたち自身が自らのイメージ作りを行い、アメリカ社会での存在価値を形成していったという、「インディアン」自身の立場から見た論点が興味深い講演でした。もう一つは、名古屋大学大学院人文学研究科教授の木下徹さんの脳科学と言語教育：脳画像イメージングの応用を中心に」先生の専門である言語習得を脳科学の視点から考えるというユニークなアプローチで、いかに言語習得には脳の活性化が行われるかについて論じたものです。

会務報告でも致しましたが、今まで総会と例会の年 2 回の講演会を行っておりましたが、来年度より、総会時に講演を行う年 1 度の開催と決定しました。毎年 2 回の講演会は講師の依頼の難しさと参加者の人数の減少があり、今回年 1 回に変更しましたこと、会員の皆様にはご理解していたければと願っております。今後とも総会の時、講演会、懇親会を開催する予定ですので、会員の皆さんの積極的な参加を期待しております。基本的には紙媒体の会報は作成しますが、経費の削減と時代の流れを考え、会員の皆様には送らず、ホームページに掲載するだけにいたしております（毎年 1 冊を国会図書館に送付し活動を発信しております）。ホームページ http://fbandewc-nagoya.jp/をご覧いただければ幸いです。

名古屋フルブライト・アソシエーション及び日本イーストウエストセンター中部同友会
会長　塚田　守
2019 年 2 月

名古屋フルブライト・アソシエーション役員

会長・事務局

塚田 守（椙山女学園大学国際コミュニケーション学部 教授 1981-83）

副会長

木下 徹（名古屋大学大学院人文研究科 教授 1989-91）

山本恵里子（在野研究者 1998　元椙山女学園大学教授）

幹事

上田慶一（三重教育文化会館 元相談役 1963-64）

藤本 博（南山大学アメリカ研究センター客員研究員 1977-80）

星野靖雄（筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91）

Marc Bremer（南山大学経営学部 教授）

加瀬豊司（四国学院大学 名誉教授 1974-76）

伊原 正（鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990）

監事

小坂敦子（愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986）

川島正樹（南山大学外国語学部 教授 1995-1996）

発行年月	平成 30 年 1 月 20 日
発行	名古屋フルブライト・アソシエーション
	〒464－8662　名古屋市千種区星が丘元町 17-3 椙山女学園大学国際コミュニケーション学部 電話：052-781-5143(直通) 電話：052-781-5291(伝言) Email: info@fbandewc-nagoya.jp　or mamoru@sugiyama-u.ac.jp URL: http://fbandewc-nagoya.jp/fb/
印刷	ツゲ印刷株式会社　　電話 052-621-2716

ISSN2188-0638